狂想詩曲　―悪魔な僕と妖精の君―

@

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
狂想詩曲　―悪魔な僕と妖精の君―

【Ｎコード】
Ｎ８８５４Ｚ

【作者名】
@

【あらすじ】
呪文を唱えれば爆発暴発は当たり前。ヒューレー子爵家の末娘は、唯一魔術の才を持ちながらもその才能は絶望的だった。自由奔放、天真爛漫に育ったお転婆娘は今年で１６歳。当然、婚約話が持ち上がるものの、彼女自身にはその気はこれっぽちもない。
彼女は父に魔女となることを宣言し、父は彼女に一つの賭けを持ち出した――。

※タイトルの『僕』は『ボク』ではなく『しもべ』です。
※この作品は自サイト【彩の渡り】より転載となります。
※お題配布サイト幻想廃墟様より『異種族お題』をお借りしています。
URL：http://www5f.biglobe.ne.jp/~sharan/title/

1　異次元からの来訪者（前書き）

※自傷行為が含まれます（魔術の一部として）。苦手な方・嫌悪感を抱かれる方はご注意ください。

1　異次元からの来訪者

ヒューレー子爵には三人の自慢の子ども達がおりました。長男は近衛騎士として城仕えをしていましたし、長女は月の妖精とも言われる程美しい女性で、次女は対象的に深紅の薔薇と喩えられるくらい美しく恋多き女性でした。

さて、実はこのヒューレー子爵にはもう一人、子どもがいたのです。今年で御年１６歳。活発で元気なその子どもの名前はシエル。空を意味するその名の通り、自由にのびのびと育っておりました。それは子爵自身が困ってしまう程に。

「お嬢様！！どちらにお出でですの？早く、早く姿を御見せ下さい。マリアが旦那様に御叱りを受けてしまうのですよ。お嬢様～～」

子爵家の屋敷では、使用人総出でその末娘の捜索が開始されていた。既に二時間、彼女は誰にも見つからずに且つ使用人の慌てふためく姿を意地悪く観察していた。木の上で。

「マリアもまだまだだね～。私がそんなありきたりな場所に隠れる訳ないじゃない」

シエルは毎回隠れ場所を変えていて、同じ場所には隠れない。そしてそれは、誰もが予想しない、というより隠れられるとも思っていない場所であり、普通の使用人では今まで彼女を見つけたものは

いない。唯一の例外は、

「お前はまた、とんでもない所にいるね。危ないからさっさとそこから降りなさい」

「お兄様！……帰ってたのね。お願い、この不肖の妹をどうか見逃して」

シエルは、木の下に立ち呆れ顔でこちらを見上げる兄に向って必死に頭を下げた。何故か兄には隠れ場所をすぐに見つけられてしまうシエルは、逆に妹に甘い兄の性格に漬け込む事にした。

（利用できるものは何でも利用しろって御姉様達がいつも言っているものね！）

そんな下心を兄は既に見通しつつも、許してしまうくらいにこの兄は末の妹に甘かった。

「屋敷の皆には僕から探す必要はないと言ってあるよ。だから早くそこから下りておいで。そしてちゃんと事情を説明してくれるね」

「さすがお兄様！待ってて、今下りるから」

「……え、まさかそのままっ！？」

兄の慌てる様などどこ吹く風のシエルは、勢いよく足元の枝を蹴って飛び降りた。

「シエル、元気なのはいいけれどもう少し考えてくれるかい。さすがに今のは心臓に悪い」

「あら。近衛騎士のお兄様ですもの。きっと見事に受け止めてくれると思ってましたわ！」

ふらつくことなくしっかり抱きとめてくれた兄に向かってシエルは最上級の笑みを送った。

「お帰りなさい！」

そのお転婆ぶりは相変わらずで、懐かしくもあり、怒るに怒れない兄はシエルに「ただいま」と返すだけにしておいた。

所変わってヒューレー子爵書斎にて、兄に説得されて連れて行かれたそこには、父に何十年も仕えている老執事と御叱りを受けてしまい半泣きのマリア、そして当主のヒューレー子爵が少々疲れた顔でシエルを待っていた。

しかし何度も脱走や逃亡を繰り返しているシエルにとっては、それは見慣れてしまった光景で彼女は全く反省などしていない。そしてこれから壮絶な親子喧嘩が始まる事は、二人の使用人は最早予測しており、静かに、さりげなく部屋を退室するのだった。

残された兄はと言えば、入った途端喧嘩腰で父を睨むシエルに内心で苦笑しながら、どうしたものかと悩んでいた。事の発端は父が急に出した貴族との婚約話だった。年頃のシエルに今までそういった話が無かった訳ではないのだが、彼女自身の問題と娘可愛さとい

う親心があり、シエルには直接一度も婚約の話はしていなかった。勿論、この兄自身も町でシエルにちょっかいをかける少年達をこっそり排除してきたということもあり、決して人のことは言えない。こうして恋愛に疎く、更には鈍くさえあるシエルは気になる男もおらず、かといって年頃の女の子のように夢見がちに育つこともなく……

「お父様、私は何度も申してますけれど結婚なんてしませんから！それにいくら見目のいい肖像画を集めてきても私の心はこれっぽちも動きませんから。ついでに言えば、この家にはまだお姉様やお兄様達のお蔭で絶対安泰だと思います。これ以上野心を持ってのし上がろうとすればお父様の白髪が増えるばかりですわ！！」

誰よりも強くそして逞しく育っていた。

「シエル！！」

「何ですか！！」

「そうやって人の気にしていることをあからさまに言うでない！！」

「事実です！！」

「なお傷つく！！」

「……では、貴族流にさりげなく且つ相手にしっかりと伝わるように、言葉を飾りたてて遠まわしにおっしゃればよいのですね。折角、お父様が密かにナレフに妖しい薬を取り寄せ、夜中丹念に額に塗り込んでいることは知らない振りをするつもりでしたのに。ああ、うっかり喋ってしまったついでですけれど、町の噂では貴族相手にば

ったくりでぼろ儲けの詐欺事件が続発してるという話ですわよ。何でも毛生え薬という名の胃薬なのですって。お父様、しっかり取り締まって下さいませ。町民からの評判もいい良き領主様ですもの、お願いしますわ」

兄はがっくりと肩を落とした父に憐れみの視線を送りながらも、女とは末恐ろしいなと他二人の妹を思い出しながら溜息を零した。彼は遠き日の素直で自分の真似ばかりしたがる幼いシエルの姿が思い浮かぶと、その成長ぶりに一抹の寂しさを感じていた。

しかし、このままでは仲裁役など必要なく一方的に決着が付きそうだったため、彼は父に助け舟を出すことにした。

「シエル、君が怒っているのはもう十分に伝わっているよ。本当は相談もなしに勝手に話を進められていた事に怒っているんだろう？まあ、いきなり結婚というのも吃驚しただろうし……。でもね、それならこの先シエルはどうするつもりなんだい。外聞や体裁なんてものはこの際置いておくとしてもだ。それが出来なければただの子どもの我儘だよ」

シエルはそう諌められて、頭が冷えた。感情のままに叫んだり、無理矢理我を通そうとすることは確かに子どものすることで。相手の思いを考えれば、父が娘を心配してのことだとはよく分かっていた。こうして思ったことをぶつけられるのも、父に何処か甘えている自分がいるという事も。

冷静さを取り戻したシエルは、一度深く息を吸って心を落ち着けると父に再度向き合った。

「お父様、私は魔女になりたいのです。貴族や平民という括りもな

く、誰に対しても同じように依頼を受けるようなそんな魔女に」

「……お前では無理だよ。今まで一度も魔術など成功させた試しなどない上に、失敗するととんでもない事が起きて暴走するようなお前ではね」

一瞬考え込む様にした後に告げられた言葉は否定だった。しかし、そんなことではシエルは諦めない。

「今までは独学でしたもの。きちんと師となる人に一から教えてもらえればできると思いません？それに、暴走するのは魔術師の才ある子どもにはよくある話です。でもこのまま制御すらできないままでは、誰も安心して私と結婚なんてできませんよ？」

それが彼女の抱えている問題だった。通常魔術師の才は遺伝するもので両方または片方が魔術師であれば魔術師の才ある子どもが生まれる。しかし、まれにシエルのように魔術師の一切いない家系から才あるものが生まれることがある。昔程ではないが、未だに魔術師に対する差別や恐れというものは少なからずあり、貴族では一層風当たりが厳しい。だからこそ、シエルは隠されていたのだった。バレてしまえば、どんな縁談すらも御破算となるばかりか、婚約中の兄の話にすら悪影響を齎しかねない。幸いの事に貴族との直接の面識はなく、誰もシエルの姿をしらない。このまま隠されるように過ごすよりも、魔女として堂々と自分らしく生きたいとシエルは思っていた。

――それが例え、家を捨てるということでも。

「お前の覚悟はようく分かったよ。しかし、普通の暮らしも望めるのだ。この腕輪を使えば、今の不完全な封印を強固で完全なものにできる。その代わりに魔術は一切使えなくなるが、私にしてみれば魔術などなくても人生は楽しく過ごせるものだよ」

父が引き出しの中から取り出したのは、金色の細い腕輪だった。中央に大粒の綺麗な瑠璃色の石が収まっている。それを手に取ると、不思議と心が落ち着いた。

「これは一体……？」

「早いだろうが、お前の誕生日祝いだ。ランスの伝手で魔術師を一人紹介してもらう事ができてね。頼んでおいたんだよ」

それがどれだけ難しいことか、昔魔術を掛けてくれたとある魔術師を必死に父が探していることからも想像に難くない。魔術師には魔術師同士の特殊な繋がりというものがあり、貴族社会で落ちぶれた家が爪弾きに遭うように、貴族嫌いが多い魔術師の中で貴族に手を貸す者は除け者にされるという。そんなことを好んでするような魔術師がいる筈もなく、だからこそ父はいつも頭を悩ませていたのだ。

「ちょっと変わった人でね。元々魔術師の同盟っていうやつに端から興味がなくて、腕のいい割に天の邪鬼で頑固で偏屈って事で山奥に一人で引き籠ってるような人だから、そういった心配はいらないんだよ」

「それは逆によく御願いがきいたもらえたわね」

「まあそこは色々とね」

そういって微笑む兄の笑顔にちょっぴり悪寒が走ったのは秘密だ。

シエルは改めてその腕輪を眺める。父も兄もこれ程までに自分を思ってくれているのだと思うとそう易々と無碍にできない。このまま腕輪を嵌めて、結婚する方が自分にとっては幸せなのだろうか……。悶々と悩み続けるシエルに、父から一つの提案がなされた。

「まぁ、そう言ってもお前も相当な覚悟を決めて魔女となると言ったのだろう？だから一つ、賭けをしてみないか」

「賭け？」

「ああ。お前自身の魔術の才を試すものだ。その腕輪を嵌めて、お前を自室に閉じ込める。そこから上手く脱出できればお前の勝ち。出られなければお前の負けだ」

「時間制限はどうするの？」

そう問うと、父は更に引き出しから一枚の紙を取り出した。

「時間は既に決まっているのではないか？」

それはシエルがこっそり出していた魔術学院の入学届の返信で、入学許可証であった。それには保護者の同意が必要で、記名欄には既に父の名と印が押されていた。それは確かにシエルの部屋にきっちりと隠していた筈のもので。

「マリアもなかなか優秀だな」

最後の最後で一本取られてしまうのだった。

「さて、急いだ方がいいのであろう？何せ魔術師が至る所に強化と保護の術を掛けたらしくてな。城の地下牢より堅固だなどと言っておったぞ」

普段はのほほんとしている父だが、実はとんだ喰わせ者であった。油断をすると痛い目を見るのは昔から何度も経験しているのだが……。

「では、お父様。勝ったらその許可証を頂き、魔女となることをお許し下さいますか？」

「ああ」

しかし、こうした不利な状況は逆にシエルの対抗心を燃え上がらせる。絶対に無理と思われるような劣勢を引っ繰り返す。自他共に認める絶望的な魔術の才だ。そこから魔女を目指すのならば、これくらい乗り越えなければなるまい。

シエルは書斎を去り、自室に入る。シエルが腕輪を嵌めると同時に外から鍵がかかる。

賭けの始まりだ――。

シエルはまず手始めに、その城の地下牢並みと言われた強固さに

挑戦してみることにした。狙いは窓ガラス。試しに鍵を開けようとしたが、まるで塗り固められたかのようにびくともしなかった。となれば……。

「やっぱりこれよね」

シエルの手には金属製の中中に重さのある蝋燭台が一つ。ものを粗末にするのは忍びないが、今回は人生が係っているのだ。

「お前の死は無駄にしないから！！」

思いっきり力いっぱい振りかざしてガラス目掛けて投げつける。ちょうどテーブルの堅そうな部分が窓ガラスに触れたと思ったらドンという鈍い音とともに蝋燭台が落下した。そのあり得ない光景に予想していたとはいえ驚いた。何せ脆い筈のガラスは無傷。逆に燭台の底の角が少し欠けていた事実が恐ろしい。

取り敢えず部屋にある三か所の窓全てに試したが、どこも結果は同じ。

後は、クローゼットの奥にある天井裏へと続く抜け道くらいだ。流石に女の子のクローゼットまでは覗くまいと高を括っていたシエルは窓の鍵同様ぴたりと接着されたような木板に思わず渾身の一撃を振るおうとして……止めた。こちらの骨が粉砕する。

扉は勿論のこと出口という出口が完璧に塞がれていた。正に八方塞がりな状況に頭を抱える。すでに一時間半は経過していた。時計が示しているのは１３時１５分くらいで、学院行きの列車は１８時出発となっている。中央駅では馬車を走らせても二時間以上はかかる。賭けに勝つには、遅くとも１６時にはここを出なければならな

い。

シエルは右腕に嵌められた腕輪を忌々しく睨みつけた。

その腕輪は見事なほど力を発揮し、苛々がピークに達すると身体の内側から熱のようなものを感じるのだが、それが一切ない。因みにそれが才ある子どもが起こす不思議な現象で、物が激しく揺れたり、窓ガラスが割れたり、室内で突風が巻き起こるなんてこともある。シエルの場合は自分の部屋を半壊にしたという経歴があり、まさにその力が今欲しいところだった。

「まあ、力自体を感じないなら同じことだと思うけれど」

物は試しと、古本市などで発掘してきた魔道書の中から解読できた呪文を読み上げていく。

それらは全て古代文字と呼ばれる、世間一般で使われる文字とは異なった特殊な文字を使用しているため、一つ一つ自分の手で解読していくしかなかったのだ。意味はほぼ直訳で、何となくしか掴めていない。その中でも、解除の術や転移術など使えそうなものを読んでいく。

が、案の定何も起きはしなかった。魔術の暴走すらも。しかし、今はそれくらいしか策が浮かばず、今度は手当たり次第魔道書を読み上げた。攻撃的なものや、結界術といった無意味なものまで。半ばヤケになっていたのかもしれない。気付けば、自分の解読済みの呪文はこれで全て呼んだことになる。

「魔術も使えない上に力技での脱出も不可能。打つ手なし、か」

喉がからからで、更に時間は刻一刻と迫って来ていた。気付けば

１６時などとっくに過ぎていて、時計の針は１７時を指そうとしていた。これでは到底駅に間に合いにない。時間切れということか。しかし、不思議な事に誰も部屋に呼びに来る者はいない。とすると、賭けはまだ続行中ということだ。

「お父様も今回ばかりは本気だったってことかしら」

疲れてベッドに横になると賭けなどもう放棄してこのまま眠ってしまいたくなる。実は奥の手の奥の手がまだ残っているのだが、これは最早プライドから何まで色んなモノを捨て去ることになるし、勝負に勝ったといえるか正直微妙なところだ。

「卑怯も手の内とは言うけれど……」

これが正解などと言われた日には何が何でも家出してみせると心積もりしているシエルだが、そもそも絶対に出れない、手段が一つも残されていないことを賭けの対象になどするだろうか……。それは最早賭けなどではなく、勝負に乗ってしまった時点で負けが決定してしまうイカサマと同じだ。何かが引っ掛かり、大切な何かを見逃している気分だった。

「これは私自身の魔術の才を試すもの――」

なれば必ず方法はあり、それに魔術は使わない。しかしそれだと才など分からないだろう。腕輪を嵌めてということは、魔力が必要ない――。

あ、と閃いた答えにシエルは急いで魔道書を探す。シエルが持つ魔道書の中で呪文を使わず、魔力を使わないものはただ一つ。その頁を引き当てると、床に敷かれたカーペットをはぎ取り物をどけて

充分なスペースを確保する。必要なモノは血と身体の一部。

シエルは髪を切った。元々腰まであった長い赤茶色の髪は肩口までばっさりと切られた。
次の段階に移ろうとしたシエルはそこでチョークがないことに気づく。今まで試したことすらなかったため部屋になかったのだ。時間はもうない。

シエルは覚悟を決めて、掌にナイフを当てた。そして一気に引き抜く。鮮血はすぐに溢れ、腕を伝い床に落ちる。石床であることが幸いで、大量の血がなくとも伸びてくれる。シエルは床に膝を付くと、そこからはもう一心不乱に魔道書に記された紋様を書き写していく。二重の円環の間に細々と記された古代文字。そしてその中央に先程切った髪と、血の付いたナイフを置く。

六ヶ所に蝋燭を立て、火を灯していく。部屋の中はすでに夕暮れに染まっていた。最後の蝋燭へと火を灯した時に変化は起きた。

赤い炎は青い炎へと色を変え、同時に今度は黒い闇色の炎が中央に立ち上る。それは髪を燃やしつくすように燃え上がり、やがて巻き起こる旋風に従って周囲の青い炎すら巻き込みながら火柱を上げた。かと思えば一瞬でそれは立ち消え、辺りには漆黒の闇に飲み込まれる。
その後、どこからともなく再び赤い炎が灯り、中央に立つ人物を照らし出した。

闇に同化するような漆黒の服を纏い、対照的に雪のように真っ白な長い髪が艶やかに揺れていて、血のように紅い唇と周囲の闇より深く昏い黒の双眼。その瞳と眼があった時、シエルはそこで力尽きる様にして倒れ込んだ。

男が咄嗟に彼女を支えると、そのまだ幼さの残る顔には何故か満足そうな微笑みが浮かんでいるのだった。

1　異次元からの来訪者（後書き）

閲覧ありがとうございました♪

2　喋る猫

カタンカタンと揺れる丁度良い振動は心地よくシエルを眠りに誘う。浮上しかけた意識はまたゆっくりと闇に溶け込む様に沈んで……。

「この子ったらいつまで爆睡してるつもりなのかしら。しかも何だかとっても間抜け顔。殿方がいる前でこれだけぐうすか寝られるなんて女の風上にも置けないわ。同じレディとしえ恥ずかしいくらい」

「こら、カサンドラっ！！長旅できっと彼女も疲れているんだよ。静かにしてるんだ。ごめんね、君も。煩くてすまない」

「いや、気にするな」

「はぁ、本当に素敵……。エディもこの子くらいスマートでカッコよければいいのに。年の割に負けちゃってるわよね。顔はそこそこいい筈なのに鈍臭いし、鈍いし？」

「う、煩い。いいから兎に角お前は静かにしてろ！」

「えー、エディの方が煩い。あ、そうだ。この子にも聞いてみる？貴方本当に奥手で女の子扱いイマイチ分かってないでしょう。学校でそれだとモテないわよ」

「おい！本当にいい加減にっ」

もぞもぞ――。

シエルはふわふわの毛皮で鼻先を撫でられているような感覚に襲われて。

――くっしゅん！！

「きゃあ！汚い、ありえない。ホントにこの子ってさつで品がない！！」

シエルが目を開けると、白猫を抱えた焦げ茶色の髪の少年が目を見開いてこっちを凝視している。誰とシエルが問うより先に、またあの甲高い女の子の声が聞こえた。

「エディ～！！寮に付いたらまず一番にシャワー使わせてよ。シャンプーは一番高級な奴で、仕上げのブラッシングまでよろしく」

シエルは眼の前の光景に唖然としていた。何せその声はあろうことか白猫の口から発せられていたから。驚くことに小さな口が器用に声に合わせて動いている。

「猫が、喋ってる……」

「本当にアナタって失礼ね。私を猫なんかと一緒にしないで頂戴。姿は似てても私はケット・シーっていう立派な妖精なんだから」

早口でそう捲くし立てると、最後に逆毛を立てて威嚇される。爪まで伸ばされようとした時に止めたのは、抱きかかえていた少年だった。

「カサンドラ、いい加減にしてくれ！わざわざ席を譲ってもらってるんだぞ。礼儀がなってないのは一体どっちだ？」

「……耳元で叫ばないで。分かったわよ、悪かったわね」

少年が厳しく叱りつけると、カサンドラと呼ばれた猫はシュンと頭垂れた。何だか可哀そうになって、シエルも謝った。

「あの、私こそごめんなさい。折角綺麗な毛並みしてるのに汚してしまって。実際品がないのは本当のことだし」

「いや、本気にしなくていいんだよ。そんなの僕にブラッシングさせるための詭弁なんだから」

すると今までしおらしくしていたカサンドラは不機嫌そうに尻尾を揺らした。そっぽを向いてツンとした様子はまるで人と同じようで、思わず可愛らしいと感じてシエルは微笑んだ。
それに目敏く気付いたカサンドラは、ますます不機嫌になる。

「やっぱりアタシ、アンタが嫌いだわ」

カサンドラは少年の手をすり抜け、器用に扉を開けると引き留める少年の声を無視して廊下へと出ていってしまった。アナタからアンタに格下げされたシエルは、初めての妖精に嫌われてしまったことに気落ちした。

「本当にごめんね。どうせすぐに帰ってくると思うしアイツは気分屋だから気にしないで」

ドアを閉めた少年は苦笑してそう言った。そこでシエルは自分がこの少年の名前すら知らないことに気づく。それを察した少年が先に自己紹介をしてくれた。

「僕はエドワード。エディって呼んでくれると嬉しいよ。それでさっきのケット・シーが僕の使い魔でカサンドラっていうんだ」

「私はシエル。使い魔はまだいないの。というより、さっき初めて妖精を見たわ。カサンドラとも凄く仲よさそうだし、エディは凄いのね」

「え？」

エドワードは吃驚した様子でこっちを見ている。シエルは何か変な事でも言ったのかと首を傾げた。

「あの、私この列車に乗るまでのことよく覚えてないんだけど、これラウルス魔術学院行きの急行列車ってことでいいのよね？」

シエルは確かめるように尋ねる。列車は既に緑豊かな山々の奥へと差しかかっていたし、首都からは随分と離れてしまっていることが分かる。ただ、使い魔といえば魔術師の証のようなもので、彼は既に魔術師ではないかという疑問が浮かんだのだ。

エドワードは戸惑いを見せながらも頷く。

「そうだよ。もう二時間くらい経ってるからもうすぐ学院に着くと思うけど……。あの、彼は君の使い魔ではないの？」

指示された先は、シエルの正面に座っている白髪の上品な顔立ち

の子ども。１０歳くらいと思われる少年は二人の注目を浴びているにも関わらず、どこか他人事のように大人しく、静かにシエルを見ている。

それに困ったのはシエル。何せ見覚えのない子だったし、エディ達と同じで目が覚めたらそこにいた程度しか分からないのだから。しかし、彼自身は何も説明する様子はない。それに、シエルには彼が妖精のようには思えなかった。

「使い魔って……彼は人間の子のようにしか見えないのだけど」

どう見ても。確かに少々整い過ぎた顔立ちで、無表情のせいでよけい人形めいて見えるということもあるが。

「えーっと……。あのさ、これは決して君を馬鹿にしてるわけじゃないんだけれどね。だから気を悪くしないでほしいんだけど。魔力を視ることってできる？」

シエルは何故彼がものすごく申し訳なさそうな顔で尋ねるのかさっぱり分からなかった。

「勿論、視えないわ。だってそういうことを教えてもらう為に学院に行くんでしょう？」

「うん。確かにそういうことも教えてくれるんだけど」

エドワードは困った顔で、どう言ったらいいか考えあぐねているようだった。

「つまり、初歩の初歩が分かってないアンタに分かりやすく説明し

てあげると、彼は魔力の塊みたいな存在で、つまり精霊ってこと。というか、何でそんなことも召喚主であるアンタが理解してないのよ」

「カサンドラ！？」

何時の間にか入ってきていたカサンドラは、エドワードの膝に飛び乗ると毛づくろいをしながらそう説明した。

「だいたいエディがまどろっこしいから全然伝わらないんじゃない。だから言ったでしょう。この子にそこまで期待なんかしてもしょうがないって。どう見ても魔術のまの字も分かってないようなひよっこじゃない」

「それは……」

気まずそうに視線を反らし、口籠るように俯く。

「ごめん、シエル」

肩を落とすエドワードは気落ちしてしまったようで、その表情を見上げていたカサンドラが長々と溜息を吐いた。

「きっとこの子にはエディがなんで謝ってるのかも分かってないと思うわよ」

カサンドラの言うとおり、シエルは自分がなぜ謝罪されているのか分かっていない。何も悪いことなどされた覚えはないのだが……。カサンドラの言っている事は全部本当のことだったし、少年が精霊であることにただただ驚いていた。

エドワードはカサンドラの言葉を確かめる様にシエルを見て、けろりとしているシエルと眼が合うと申し訳なさと困惑が入り混じった複雑な表情を見せる。

「あのさ、シエル。君はもしかして妖精ばかりでなく魔術師にも会ったことがないんじゃないかい？」

「そうね。本当に小さい頃に一度は会っているけれど、私が住んでた所は田舎の小さな町で魔術師は滅多に訪れない場所だったわ」

シエルの答えを聞いたエドワードはスッと表情を改めて、真剣な様子で「そのことはあまり人に言わない方がいい」と忠告する。その有無を言わせないような強い言い方に、深刻さを感じ取ったシエルは頷く。

「でも、どうして？」

「魔術師の世界ではね、血統を重んじるような古い考え方が未だに強く残っているんだ。だから、魔術師同士から生まれた子どもは貴族のような扱いで、名門と呼ばれる魔術師の家系も実際にある。逆に、魔術師ではないアルブスと呼ばれる人から生まれる子どもは疎んじられる傾向が強い。言葉は悪いけれど【異端者】と言われて、差別されてるんだ」

それは貴族が魔術師を嫌う様に。

「それでも昔ほどではないんだ。僕のように片方がアルブスって子は結構多いんだよ。未だに血を重んじているのは極一部といっていい。でも【異端者】に対してはまだ根強く差別が残っていてね。魔

術師はアルブスより上って意識がどこかにあるみたいだから、気に食わないなんだろうけど」

「学院自体は広く公平にあることを謳っているけれど、学校って閉鎖的な場所だもの。陰険な虐めとかもあるみたいだから。まぁ、アンタなら逆に反撃できそうなくらい逞しそうだけど」

魔術師の世界も決して思っていた程開放的ではなかったようだ。魔術師が魔術師を差別することがシエルにはよく理解できなかったが。その貴族社会と似たような状況に、シエルは少しがっかりしていた。魔術師と貴族が互いに嫌っているのは似た者同士だからではないかと疑ってしまいたくなる。

知らず眉間に皺を寄せていたシエルに対して、エドワードがそれを打ち消すように明るく別の話題を振る舞う。

「その話はこれくらいにするとして、さ。僕が謝った理由をきちんと説明させてよ」

「私が魔術のド素人で、なんでかエディが何かを期待してったって話？」

「うん……。その、僕がちょうど座れる席を探してここらを歩いてた時に偶然彼の姿を見かけてね。すぐに彼が精霊だって分かったから、思わず契約者を探したら君がいて」

「魔力が全く感じられなくて吃驚したのよ」

カサンドラが旨い具合にエドワードの言葉を盗む。怒るエドワードなど気にした風もなく飄々としているカサンドラ。まるで漫才の

ようなその掛け合いは見ているこちらが楽しくなってしまう。

「もう！お前はいいから黙ってろ。で、そう。僕は吃驚したんだ、君がそれほどまで完璧に魔力を隠せる程の魔術の使い手なんだって」

その予想外の言葉にシエルは驚く。勘違いにも程があるというものだ。しかもエドワードの眼が心なしかきらきらと輝いて話しに熱が籠り始めていた。

「だってさ、精霊を召喚するってだけでも凄いのにそれを使い魔にしてるなんて、相当高位な魔術師だって証拠だろう？それを僕より小さい子がやってるんだ。しかも、ここまで完璧に魔力を隠した上に気配すら感じさせないなんて、今年はとんでもない子が入ってくるもんだって思ってさ。是非話してみたいってこうやって相席をお願いしたんだ」

「……ちょっと待って、エディ」

シエルは勢いにのって饒舌に語るエドワードの言葉に聞き捨てならないものが含まれていることに気づく。思わず手で制しつつ、その誤解を確かめる様に苦笑いで尋ねた。

「エディって何歳なの」

エドワードは分かっていないのか、１６歳だよと笑顔で答える。その答えに一体自分は幾つに見られていたのかと思ったが、敢えて聞くまい。

「私も１６よ」

「え、嘘だろ！？」

「……それはどういう意味かしら」

冷気を帯びた視線のままで微笑むシエルに対してエドワードはようやく自分の失言を悟ったようだ。カサンドラの「馬鹿ね」という声がやけに大きく室内に響いた。恐縮した様子のエドワードに暫く怒ったふりでも続けようかと少し意地悪な気持にもなったシエルだったが、

それより今は自分より明らかに色々な事を知ってるエドワードに色々尋ねたい気持ちが勝った。

何より、彼の話で自分が今困った状況にあることを思い出したのだ。シエルは上着を脱いで、袖を捲る。

「ちょっと、エディ聞きたいことが……って何で目を反らすの？」

エドワードは不自然に扉の方を向いている。その耳が何故か真っ赤になっている。それで改めて自分の格好を見てみる。動きやすいようにズボンを穿いて、上には薄いシャツと既に脱いだパーカーが一枚。貴族では男装ともとれるような格好だが、町では一般的に女の子が着ていて、別段珍しいことはない。

「いや、そこは首を傾げる所じゃないわよ。エディはアンタがいきなり脱ぎだすから、びっくり」

「いいから、一々説明しなくていいから！！！」

そういう事かと得心したシエルは笑って大丈夫よとエドワードに教える。恐る恐る振り返るエドワードに面白いなと思いながら、右

腕に嵌められた腕輪を指し示す。

「エディが誤解したのって、多分これのせいだと思うのよ。私って呪文唱えたらとんでもない事起きて危ないから、父からもらってね。こうやって魔力を封印してくれるのは有難いんだけど、これ何でか外れなくて困ってるの」

そうしてぴったりと嵌ったそれを叩いたり、石の部分を外そうと弄ってみるのだが本当に呆れるほど頑丈だった。どうしたらいいと思う、とシエルが聞こうと顔を上げるとそこには唖然と固まる二人の姿。目を見開いて口が半開きになってる様はそっくりで思わず笑ってしまう。

「二人ともどうしたの？」

「それは本当に君のお父様が？」

「ええ。誕生日祝いですって。まさかここまで外れないとは思わなくて」

「そう……」

その表情が陰り、一瞬悲しみを帯びたものへと変わる。思わずシエルがエドワードの名を呼ぶとそれは忽ち消えてしまったのだが。それを誤魔化すようにエドワードは笑みを浮かべる。

「それは多分、直ぐに外れると思うよ。外側から別の魔力を当てればいいはずだから」

そうしてエドワードが腕輪の石の部分に手を翳すと、呆気なくそ

れは外れた。

「こんなに簡単に外せるなんてね……。ありがとうエドワード」

「どういたしまして。これで僕にもよく魔力が見えるようになったよ。君も何だか感覚が戻ってきたんじゃない？」

「そうね。確かに熱っていうか、温かい小さな炎みたいなのが身体の中にあるみたい」

何時もの感覚が戻ってきて、シエルは何だかすっきりした心持だった。

「こうやって視るとホントにド素人よね。魔力がダダ漏れだわ」

伏した状態でちらりと目だけを動かしてこちらを見たカサンドラは相変わらず意地の悪い言い方をするけれど、慣れてしまえばそれが彼女の何時も通りだと分かる。

「それでも精霊を召喚できるだけで凄いことさ。どんなに高度な技術があっても精霊は気に入らなければ呼びかけには答えない。魔術師の素質は充分だよ」

そうやって魔術に関して誉められるのは初めての事でシエルは嬉しくなった。

「誉められて調子乗ってんじゃないわよ……。アンタこのままだと見極め式で落とされて年少クラスになるわよ。どうせ魔術関係の知識はゼロなんでしょう？だったら筆記は絶望的、魔力操作も見たとおりで、精霊の召喚主って以外評価ないんじゃない」

その不穏な言葉に対して、「ああ、そうか……」と若干苦笑気味のエドワード。

「まあ、そんな不安そうな顔しなくても大丈夫だよ。学院は実力でクラス分けがされててね、入学最初に見極め式っていって三種類の観点からみた総合評価で決まるんだ。最初に筆記試験があってカサンドラが言ったように魔術関連のことが問題になってる。で、次に実技試験があって試験官の出した課題に合わせて魔術を見せるんだ。それで最後に学院長との面接。人物評価みたいなのものらしいよ」

エドワードによれば、学院には6歳を超えれば誰もが入学を認められるらしい。通常初等部・中等部・高等部に分かれているのだが、飛び級も認められている。さらに専門性の高い大学のような機関もあり、実力次第ではエドワードくらいの年齢でもそこに振り分けられるような者もいうという。

そして、シエルのように基礎の基礎を教えるのは初等部のみで、一般的に両親や家庭教師等から魔術を習っている者がほとんどであるため、シエルくらい年の者が初等部に配属されるのは稀とのこと。

「学院は初等部の教育も充実してるから、小さい頃から通わせる人も多くてね。実際その子達は1、2年で中等部レベルに達するから、普通の学校みたいに12歳までって事はなくて実質は6歳から8歳の子どもたちしかいないんだよね」

ということは……。

このままいけば確実にシエルは初等部行きで、子ども達に混じって勉強ということになる。

流石にそれは恥ずかしい、というか。

「どうにか方法はないの……？」

落ち込むシエルにエドワードは励ましならぬ励ましを送る。

「精霊を召喚したことはかなりの評価に繋がる筈だよ。後は君と彼が良好な関係であれば問題ないさ。精霊に好かれる者はそれだけで大きな才能なんだから」

ずっと大人しく座っている少年に目を向けてみる。彼は変わり映えのしないその景色を退屈そうに眺めていた。

一見するだけで良好とは言い難い二人である。それはエドワード達の姿を見れば尚更に。

魔女を目指すシエルの道は、スタート時点で巨大で困難な壁を目の前にしていた。

3　陽気なガーゴイル

２０　陽気なガーゴイル

「いつまで待たせるつもり」

列車は既にラウルス魔術学院に到着していた。次々と少年少女達が荷物片手に降りていく中で、シエルはエドワードから借りた教科書を一人熟読している。それは、妖精の種類や容姿・性格・生息するする地方といった妖精全般に関することが様々載っているものだった。妖精という分野一括りだけでも５００頁を優に超える分量があり、他にも薬物学・歴史学・言語学など数えきれない程の分野が存在しているという。それだけ幅広く豊富な知識が魔女には必要とされるということだ。

それはこの一冊を渡された時から何となく理解できていた。そして、シエルがその本を読んでいるのは何も筆記試験の悪足掻きという訳ではない。単純に面白かったからだ。色鮮やかな図解や丁寧な解説もさることながら、所々に記された豆知識が筆者の失敗談や愉快な体験を交えて添えてある。今まで読んできた魔道書よりも余程とっつきやすく分かりやすい。

とっくに荷物を棚から下ろして降りる準備の出来ているエドワードは、カサンドラの嫌みすら聞こえていないシエルの集中ぶりに幼い頃の自分の姿が被って苦笑した。

「シエル、その本暫く貸してあげるからさ。寮に着いてからゆっくり読むといいよ」

「いいの！？」

その思ってもみない申し出に一も二もなく飛びつく。エドワードが了承すると、上機嫌でシエルは荷物を運び出し始める。分かりやすいわね、という呆れた呟きが背後から聞こえるも、鼻歌交じりのシエルには全く届いていない。そうしてようやく彼らはラウルス魔術学院の敷地を踏むことになった。

そこは見渡す限りの緑に囲まれた広大な自然がどこまでも続いていた。右手には深い森が広がり、左手には町一つはすっぽりと入りそうな巨大な湖が。そしてその先に三つの主塔が連なる城があった。夕闇に浮かぶそれは堅固な砦に囲まれ巨大な影を落としていた。

「まるで要塞ね……」

色々な意味で想像を超えていた学院の姿にそう呟けばその通りと答える声がある。その嗄れた老人の声に驚いて顔を上げると、すぐ傍にあった街灯の上に座すガーゴイルの像が目に止る。街灯の揺れる炎に照らし出されて不気味さを増すその彫像の目が、ぎょろりと動く。近くにいた女の子がちょうどそれを見たようで甲高い叫び声があがった。

「おお！今年もいい反応を得られたようじゃな。魔女や魔術師の卵であるラウルスの生徒諸君、こんばんは、そしてお初にお目にかかる。わしは６６６のガーゴイルの内の第一番目ウーヌス。全ての始まりにして終りを司る。さぁさぁ、迷い子たち。光の導きに従って進み給え！」

陽気なガーゴイルがそう叫ぶと同時に音を立てて炎が次々と城に向かって一直線に湖を突っ切るようにして灯る。それはやがて城に

辿りつくと幻想的な光となって城を照らし出す。

「さあ、恐れてはいけない！立ち止まってもいけない！振り返ってもいけない！勇気を出して始めの一歩を踏み出したまえ。さすれば光自身が君たちを導くだろう」

ホームに屯していた子ども達の中でも取分け小さな子達が興味津津でその灯りの回廊の始まりの部分へと踏み込んだ。その瞬間、風を切るような早さで彼らはその回廊の先へと吸い込まれていった。姿の見えなくなった子達の笑い声が静かな高原に木霊する。それからは、堰を切るようにして、次々と人が押し寄せる。その度に掃除機に吸いこまれるようにして人が消えていくのだから面白い。暫くすると駅のホームを埋め尽くすようにいた人間が数える程に減っていた。

「お嬢さんはいかないのかね？」

ずっと沈黙していたガーゴイルが静かに問う。シエルはその波に乗ることなくその場に立って様子を観察していた。ガーゴイルはどこか面白いものを見るような視線を向けている。

「ちょっと貴方に聞いてみたいことがあって」

「探究心があることは良きことだな。感心感心。よし、いいじゃろう。わしに答えられる範囲でならお答え信ぜよう」

「どうして学院は学校なのに要塞なの？」

「ふむ。それは逆の方が正しいな。要塞を学校として利用したのだ」

過去に行われたある大きな戦争の激戦の舞台だったのだと、ガーゴイルは語った。それを戦争終結後に暫くして初代の学院長がここを魔術の学院とすることを宣言したという。

「だから、学院の中は非常に複雑な作りになっている。迷子になる子も多いぞ。そして秘密の抜け穴や隠し扉なんてものある。授業をサボりたくなったら打って付けじゃぞ」

ガーゴイルはそういうと片目を痛そうに瞑る。それがウインクだと気付いたのは彼が笑っていたからだ。その笑顔すら凶悪で夢に出そうな破壊力を持っていたのだが。

「これですっきりしたかね？詳しく知りたければ図書館を尋ねてみるといい。さぁ、早くしないと夕食を食べ損ねてしまうぞ」

「最後に一つだけ。あの子達はどうするの？」

回廊のスタート地点にはその一歩を踏み出せずに立ち往生している子もいた。確かに足元は湖でしっかりとした足場が見えている訳ではない。加えて少々高さもあるため、怖いのだろう。そんな怯える子たちを優しく励ます者もいた。エドワードの姿もその中に。

「ここに君がいる。それが答えではないのかね」

ニタリと笑うガーゴイルにシエルも同じ笑みを返した。その時ちょうど馬の嘶きとともに疾走する蹄の音が幾つか近づいてくる。それは湖の回廊の先から聞こえてくるようだ。灯りに照らし出されて姿を現したそれは、回廊の出口付近で失速し立ち止まる。その美しく幻想的な姿に誰もが言葉を失った。漆黒の鬣を靡かせる雄々しいそれは普通の馬よりも一回り大きく、背中には翼を持っていた。

「迎えが来たようじゃな。水馬の中でも大人しく人懐こい種だから、安心して乗るといいぞ。これで暫しの別れだ。最後にお嬢さん、名前を教えてくれんか？」

「シエルよ。色々教えてくれてありがとう、ウーヌス」

「いい名じゃ。その道にイシスの祝福があらんことを」

ガーゴイルに見送られてシエルは水馬の方へと向かった。その姿に気付いたエドワードが、余っている一頭の方へと案内する。

近くで見ると見上げる程に大きく、馬の背には到底手が届かない。その背で波打つように揺れる鬣は影のようで、よく観察してみればその姿全体が闇でできているように揺らいでいる。水馬は徐にシエルに鼻先を近づけた。額に微かに触れる感触が確かにあって、吐息も少し生温かい。見た目はおぼろげな存在だがしっかりとした実体があるようだった。そうして何かを確認した水馬は、シエルの間に静かに腰を落とす。どうやら乗ってもいいということらしい。そっと手を伸ばせば、ふわりと黒い影を通過してその下のしっかりした肌に触れた。

水馬は真綿のような柔らかさを持つ靄に身体全体が包まれているようだった。

シエルが腰を下ろすと、ぐっと筋肉が躍動するのを感じると共に身体が持ち上げられる。その首筋に手を添えて支えにする。いつもより遥かに高い視点に高揚感が湧きあがる。

全ての水馬に生徒が乗っていることを確認して、そこで自分がす

っかり彼の存在を忘れていたことに気づく。慌てて見渡しても何処にも姿がない。ガーゴイルと話している時までは確かに自分の横に立っていた筈だった。

きょろきょろと不審な動きをするシエルに気付いたエドワードが傍に寄ってきて声をかける。シエルは彼に少年の姿を尋ねた。

「それなら心配いらないよ。彼は精霊だもの。先に行ってるんじゃないかな」

「そうなの……」

いくら初めての経験で浮かれていたとはいえ、自分で呼び出した癖にほったらかしにしている事実にシエルは反省した。少年を呼ぼうとして、彼の名すら知らないことに思い至ったのだ。どう考えても身勝手すぎる自分の振る舞いに、少年も呆れたに違いない。

「アンタ、愛想尽かされたんじゃないの」

その言葉に覚えがあり過ぎて最早反論する気もない。

「そうだね、シエルはもうちょっと彼を気にかけるべきだと思うよ。精霊は妖精と違って召喚主以外にこの世界と繋がりを持たないから。孤独な存在なんだよ」

その言葉に、少年のどこか遠くを見るような無関心で感情の見えない漆黒の瞳が思い浮かんだ。人を寄せつけないような冷たい雰囲気に無意識に身構えている自分がいた。

「何気後れしてんのよ。私に初対面でこうも馴れ馴れしいアンタだ

もの。その神経の図太さだけは自信を持っていいわよ」

カサンドラの皮肉な口調に混じった小さい励ましにシエルは思わず笑った。

「それって励ましてるの？優しいのね」

「ほんとに厚かましいわ」

何だか本当にらしくなかったなとシエルは思った。

名前をちゃんと聞いてみよう。それからできれば色んな話を聞いてみたい。

自分らしくありたいと願って家を飛び出したのに、これでは本末転倒だ。自分の思っていることをきちんと伝えて真正面からぶつかるのがシエルのスタンスだった。

単純でいい。小細工なんてできるほど器用な性格じゃないから。目標友達！できたらカサンドラ達みたいに信頼し合える関係になりたい。

そもそも使い魔の契約すら結んでいないにも関わらずメラメラと変な闘志を燃やし始めたシエルは、決意を胸に気合入れに両方を軽く叩く。

「さあ、学院へ」

行きましょう！と続く筈の彼女の言葉は発するタイミングを失ってしまった。目の前には、獅子と月桂樹の冠を模したレリーフが彫

られた立派な大扉があり、その遥か上には大時計が夜を指し示している。

水馬が行き先を告げた瞬間に移動してしまうことをエドワードがこっそり教えてくれた。シエルの顔が恥ずかしさに真っ赤に染まったのはいうまでもない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8854z/

狂想詩曲　―悪魔な僕と妖精の君―

2011年12月29日00時55分発行